

日本語 古典文法

王雪松 \ 編
清水行健 \ 校正



WUHAN UNIVERSITY PRESS
武汉大学出版社

日本語 古典文法

王雪松 \ 編
清水行健 \ 校正

江苏工业学院图书馆
藏书章



WUHAN UNIVERSITY PRESS
武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语古典文法/王雪松编;清水行健校正. —武汉:武汉大学出版社,2005.8

ISBN 7-307-04663-6

I. 日… I. ①王… ②清… III. 日语—语法—古代 N. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 081854 号

责任编辑:谢群英 责任校对:清水行健 版式设计:支笛

出版发行:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件:wdp4@whu.edu.cn 网址:www.wdp.whu.edu.cn)

印刷:湖北省石首市第二印刷厂

开本:787×980 1/16 印张:11.125 字数:168千字

版次:2005年8月第1版 2005年8月第1次印刷

ISBN 7-307-04663-6/H·390 定价:19.50元

版权所有,不得翻印;凡购我社的图书,如有缺页、倒页、脱页等质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

前言

日本是中国一衣带水的邻邦。两国建交以后，特别是我国实行改革开放政策以来，两国的经贸往来、文化交流日趋频繁。谈到日本，很多人的脑海中浮现的是腾飞的日本经济。日本这个二战后经济萧条、民生凋敝的战败国，经过几十年的努力拼搏一跃成为世界经济大国，对此人们赞叹不止，但对日本的山川风物、历史沿革、政治经济、文化教育、风土人情，人们的了解并不多。

虽然日本不是拥有几千年文明史的古国，更谈不上博大精深，但日本独特的地理位置、自然环境和历史条件，都深深地影响着日本国人的心理，并反映到风俗、文化之中，这些都使得日本的文学作品别具风韵。

文学是对社会生活的全面反映。认识一个国家、一个民族的有效途径就是阅读、研究其文学作品。从古典文学名著《源氏物语》到诺贝尔文学奖获得者川端康成的《雪国》，明治时代到昭和时代以来的日本近代文学作品，是日本文学发展史上的璀璨珍珠。

对于日语学习者来说，提高语学能力不能仅仅只停留在单词、语法、句子结构等即所谓的语言实践上，还必须不断地加深对日本历史、民族文化和传统知识的了解，而阅读文学作品则是其重要渠道。阅读日本的文学作品，不仅可以学到丰富的日本文学知识，提高鉴赏日本文学作品的能力，了解日本的风土人情和民族思想，也可以为进一步提高日语水平打下坚实的基础。对于日语专业的学生来说，无论是学习语言还是提高文学素养，都离不开阅读文学作品。

要想阅读日本文学作品，特别是前近代的文学作品，就必须懂得古语语法，也就是说古语语法是开启阅读日本前近代文学作品之门的钥匙。

时下国内外已有一些文人、学者、语言工作者在研究日本文学，书店里摆放着为数不少的教材类、鉴赏类书籍，日语学习者也由此了解到日本有不少的优秀文学作品，如《源氏物语》、《更级日记》、《平家物语》等。但如

果日语学习者不懂古语语法的话，那么阅读这些作品就会困难重重。

本教材着眼于日语专业本科生，根据本科生的教学时数和接受能力，从多本教材/参考书中精选出浅显易懂、便于掌握的内容编撰成册，供日语专业本科生使用。

本教材特点如下：

1. 言简意赅、浅显易懂，书中配有大量表格。
2. 编者对多本教材/参考书中的例句去繁就简，书中所用例句均有现代语译文。
3. 着眼于基础练习，练习题答案中配有现代语译文。
4. 常用古语、基础知识表等已登于附录中。

编者在留日期间通过有心的学习和研究，收集了不少日语古语语法方面的资料。在本教材的编撰过程中，编者将相关资料和教学实践进行了有机的结合，去繁就简、去难就易，努力使本教材适用于海外日语学习者。为了使本教材地道、严谨，编者邀请了日本友人吉田正先生对此书作了细致的审读，清水行健先生对此书进行了校对。在此向他们那种不为名利、默默奉献、全力支持海外日语教育事业的高尚精神表示深深的敬意和由衷的感谢。此外，武汉大学出版社为此书的出版给予了很多帮助，在此一并表示感谢。

考虑到本教材的特殊性，在编撰过程中参考了许多教材、辞典、参考书等，较多地引用了其中的部分内容，详见参考书目。在此，谨向那些教材、辞典、参考书的作者、出版社以及（日本）MPC 株式会社表示衷心的感谢。

由于编者水平有限，谬误之处在所难免，敬请读者批评指正。

编 者

2005 年 7 月



古典に親しもう

古典とは、長い年月を通して多くの人々の鑑賞に値し、今もなお生き生きとその生命を保ち続けている作品のことを言います。古典は現在と過去の繋がり証であると同時に、将来への導きでもあります。

古文を正しく解釈し、読解・鑑賞するためには、文法と古語の知識がどうしても必要になります。本書は基本的な古典文法の学習を目的として編集したものであります。

古典に親しむためには、現代語でその内容を言い換えてみることは重要であります。これによって、私たちの使っている現代の日本語と昔の日本語との繋がりがしだいに理解されてきます。こうした努力を重ねるうちに古典に対する親しみが増して、古人の心に直接触れ、日本人としての生きていく意義を確かめることができます。

人間は現代にのみ生きているのではなく、長い過去を背景にして将来を見通しつつ生きていくものであります。古典を読み、自分の力で古典を理解し、古典を深く味わうことによって、古典文章の調子がおのずから分かり、現代に生きる私たちはこの複雑に多様化した現実の中から、自分自身の立脚点をしっかりと見定める姿勢を身につけることができるのであります。

本テキストの全体の構成は、次のようになっています。

- ①理解しやすく覚えやすいように、箇条書き・まとめの表などを使い、解説に工夫をこらしています。
- ②何冊もの教科書・参考書に採り上げられている古文の作品を中心に、できるだけ分かりやすい用例を選んで、すべての用例の下側に口語訳を併記しています。
- ③基礎的な問題をいれ、必要に応じて訳をつけました。
- ④覚えるべき・参考になる知識を整理し、付録に書き入れています。

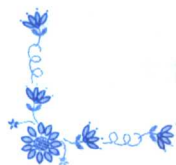


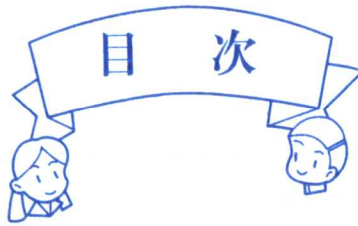
本テキストをまとめるに当たって、友人の吉田正様、清水行健様からご指導・助言・校正を頂きました。方々に謝意を表します。また、古語そのものの特殊性を考えまして、数多くの教科書・参考書・辞書から一部の内容をそのまま引用しました。ここに引用・参考した教科書・参考書・辞書の著/編者・出版社および株式会社エム・ピー・シーに感謝申し上げます。

本テキストは、海外日本語学習者の「古語」の力を伸ばすための一助となれば幸いです。

編 者

2005年7月





古典文法入門

一 古典語と現代語	1
二 歴史的仮名づかい	2
三 歴史的仮名づかいの読み方	2
四 言葉の単位	4
1 文章	4
2 文	4
3 文節	4
4 文節の種類	5
① 主語・述語	5
② 修飾語	5
③ 接統語	5
④ 並立語	5
⑤ 独立語	6
⑥ 補助語	6
5 単語	6
6 単語の種類	7
① 自立語と付属語	7
② 活用のない語と活用のある語	7
③ 品詞の分類	8
練習一	9

目

活用のある自立語（動詞・形容詞・形容動詞）

一 動詞	11
------------	----

次





1 動詞とは	11
2 動詞の特徴	11
3 活用の種類	12
① 四段活用	13
② 上二段活用	15
③ 下二段活用	16
練習二	19
④ 上一段活用	20
⑤ 下一段活用	21
練習三	22
⑥ カ行変格活用	23
⑦ サ行変格活用	23
⑧ ナ行変格活用	25
⑨ ラ行変格活用	25
練習四	26
4 音便	27
① 音便とは	27
② 音便の種類	27
③ 動詞の音便	27
5 自動詞と他動詞	28
二 形容詞	29
1 形容詞とは	29
2 形容詞の特徴	29
3 形容詞の活用	30
① ク活用とシク活用	30
② カリ活用	31
4 形容詞の語幹の用法	32
5 形容詞の音便	33
練習五	33
三 形容動詞	34

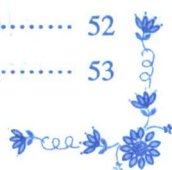
1 形容動詞とは	34
2 形容動詞の特徴	34
3 形容動詞の活用	34
4 形容動詞の語幹の用法	35
5 形容動詞の音便	36
練習六	36
四 活用形の用法	37
1 未然形	37
2 連用形	38
3 終止形	39
4 連体形	39
5 已然形	40
6 命令形	41
練習七	41

活用のある付属語——助動詞

一 助動詞とは	42
二 助動詞の分類	42
三 助動詞のいろいろ	43
1 使役・尊敬の助動詞 す・さす・しむ	43
2 自発・可能・受身・尊敬の助動詞 る・らる	45
練習八	46
3 打消の助動詞 ず	47
4 過去の助動詞 き・けり	47
5 完了の助動詞 つ・ぬ	48
6 完了の助動詞 たり・り	50
練習九	51
7 推量の助動詞 む(ん)・むず(んず)	52
8 推量の助動詞 けむ(けん)	53

目

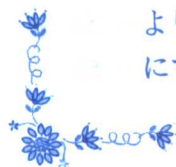
次



9 推量の助動詞 らむ(らん)	54
練習十	56
10 推量の助動詞 らし	57
11 推量の助動詞 まし	57
12 推量の助動詞 めり	59
13 推量の助動詞 べし	59
14 打消推量の助動詞 じ	62
15 打消推量の助動詞 まじ	62
練習十一	64
16 推定 伝聞の助動詞 なり	65
17 希望の助動詞 まほし・たし	65
18 比況の助動詞 ごとし	66
19 断定の助動詞 なり・たり	67
練習十二	68
20 奈良時代の助動詞 ゆ・らゆ・す・ふ・ましじ	69

活用がない付属語——助詞

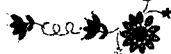
一 助詞とは	72
二 助詞の特徴	72
三 助詞の種類	73
1 格助詞	74
が・の	74
に	75
を	77
練習十三	78
へ	79
と	79
より・から	80
にて	81



して	82
練習十四	83
2 接続助詞	84
ば	84
と・とも	85
ど・ども	86
が・に・を	87
て・して	88
で	88
つつ	89
ながら	89
ものの・ものから・ものを・ものゆゑ	90
練習十五	91
3 係助詞	92
ぞ・なむ	92
や(やは)・か(かは)	93
こそ	94
練習十六	94
4 副助詞	95
だに	95
すら	95
さへ	96
のみ	96
ばかり	97
など	97
まで	98
し	98
練習十七	99
5 終助詞	100
な	100

目

次



そ	100
ばや	101
なむ (なん)	101
もがな (かな・もが・もがも)	101
てしがな (てしかな)・てしが (てしか) / にしがな (にしかな) ・にしが (にしか)	102
な	102
かな (かも)・か	103
は・も	103
ぞ	104
かし	104
6 間投助詞	104
や・よ	105
を	105
7 奈良時代の助詞	106

活用がない自立語——名詞・副詞・連体詞・接統詞・感動詞

1 名詞	107
2 副詞	108
3 連体詞	109
4 接統詞	110
5 感動詞	112

文の構成

一 文節と文節の関係	114
1 主語・述語	114
2 修飾語・被修飾語	114
3 接統語	115

4	並立語	115
5	独立語	115
6	補助語	116
二	特殊な文の構成	116
1	倒置	116
2	省略	116
3	挿入	117
4	引用	117
三	文の分類	117
1	文の構造上の分類	117
2	文の意味上の分類	118

敬 語

一	敬語とは	120
二	敬語の本動詞と補助動詞	120
三	尊敬語	121
1	尊敬の動詞	121
2	尊敬の助動詞	122
3	尊敬の補助動詞	122
四	謙譲語	122
1	謙譲語の動詞	122
2	謙譲語の補助動詞	123
五	丁寧語	123
1	丁寧語の動詞	123
2	丁寧語の補助動詞	124
六	特別な敬語表現	124
1	二方面への敬語	124
2	最高敬語	124
3	自敬表現	125
	練習十八	127

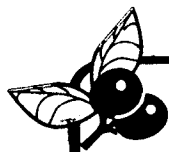
目

次

修 辞

一	枕詞	129
二	序詞	131
三	掛詞	132
四	縁語	133
五	体言止め	134
六	本歌取り	134
七	見立てと擬人法	135
付録一	紛らわしい語の識別	136
付録二	文語・口語対照活用表	140
	動詞	140
	形容詞	142
	形容動詞	142
	助動詞活用表	143
	助詞の分類	144
付録三	重要古語一覧	146
	練習解答	153
	参考文献	163





古典文法入門

一 古典語と現代語

古典語は、上代（奈良）・中古（平安）・中世（鎌倉室町）・近世（江戸）の各時代の言葉を含む。平安時代中期（『枕草子』や『源氏物語』の書かれた時代）の言葉の文法は古典文法を中心である。古典語と現代語は共に日本語であり、使われる時代が異なるだけである。

●^{いに}過^えし世を静かに思へ、^{もも}百年もきのふのごとし。（千曲川旅情の歌）

◎大昔のことを静かに思ってみれば、百年の長い間も昨日のことのようだ。

例文のような古典の言葉を古語、或いは文語と言ひ、訳文のような現代の言葉を現代語、或いは口語と言う。

古語には、現代語では使われない言葉があり、いわゆる古文特有語である。助動詞はもっとも現代語と異なる品詞である。例えば、「まほし」は現代語では使われていない。また、古語には現代語と意味の異なる言葉があり、いわゆる古今異義語である。例えば、「うつくし」は、古語では「かわいい」という意味で使われる。

口語文法（現代語の文法）に対し、古語の文法を文語文法と言う。文語文法と口語文法の主な違いは、

- ① 活用が違う。
- ② 古語には係り結びがある。
- ③ 古語の已然形にあたる活用形が現代語では仮定形である。
- ④ 古語では助詞の「が」や「を」が省略されることがある。



- ⑤ 仮名づかいが違う。

二 歴史的仮名づかい

いろは ^{ワ オエ} にほへと	ちりぬるを	色 ^{には} は匂へど	散りぬるを
わかよたれそ	つねならむ ^ン	我が世 ^{たれ} 誰ぞ	常ならむ
う ^イ ぬのおくやま	け ^{キョウ} ふこえて	有 ^{うる} 為の奥山	今 ^{けふ} 日越えて
あさきゆめみし	ゑ ^{エイ} ひもせず	浅き夢見じ	醉 ^ゑ ひもせず

◎(花の)色は美しく照り輝くけれども、(いずれは)散ってしまう。(それと同様に)われわれの世の中も誰が、変わらないことがあろうか、いや、移り変わるものである。移り変わりがはげしい無常の世にたとえられる奥深い山を、今日も越えて(行くような人生で)、浅はかな夢を見るようなことはしまい、(また、世の中のことに心をうばわれて)正気を失うようなこともしない。

「いろは歌」

同じ文字を二度使わずに、四十七音の清音を歌に詠んでいる「いろは歌」である。左段は原文で、右段は意味を分かりやすくするために漢字をあて、濁点を加えたものである。現代語の仮名づかいを現代仮名づかい、古典の言葉に使われている仮名づかいを「歴史的仮名づかい」と言う。原文の太文字で示してあるのが「歴史的仮名づかい」である。歴史仮名づかいは、平安時代の中ごろの発音をもとにして定められたものである。

三 歴史的仮名づかいの読み方

歴史的仮名づかいが正しく読めないと、古文を読むことができない。文法学習は、この歴史仮名づかいが正しく読めることから始まるのである。読むときには次の点に注意しよう。

